〈新任平井先生へインタビュー〉

甲南大学や経済学部生の印象を教えて下さい。

出身が神戸なのですが、垂水の方に住んでいたので名前しか知らなくて、もっと大きな大学と思っていました。初めてここに面接に来た時にこじんまりした大学でびっくりした、というのが印象です。

前任の大学に比べて学部教育に力を入れているという印象を受けます。前の大学は学部生をほったらかしでしたが、こちらでは学部教育どうするか等の話し合いが結構あって、びっくりしました。

学生については結構大人しいという印象です。

平井先生の研究テーマを教えて下さい

僕の研究テーマは「日本植民地時代の台湾」を対象にし、当時の台湾の経済が、宗主国だった日本との関係で完結していないということを証明するため、色々な地域や、後は現地社会との関わりの中で、植民地経済というのは展開していたという、つまり単に日本におんぶに抱っこではなかったということを証明したいということです。

ではその研究テーマに興味を持たれたきっかけはありますか

学問的な話ではなく、大学二年生の時、入っていたラグビーサークルの友達が夏に台湾に旅行に行くという話をしていて、一緒に行くという話になり、行きました。あの一日は僕の将来を変えた運命的な日かな。

台湾という島は面積が小さく、十日程、バックパックのようなもので一周しました。それまでにも海外へ行ったことがありましたが、基本的には親と行くと、ある程度良いホテルに泊まって観光地を回って終わりです。しかし、その時は学生だけで行ったので色々な辺鄙な所に泊まりました。すると日本と全然違い結構衝撃的なことが多く、台湾が君たちにとってどういう存在かは分からないけど、当時は開発途上国の優等生と言われて、アジアNIEsと言われた時期ということもあり、結構な先進国を予想していましたが全然そうではなくて、汚い町に唐突に大きくてきれいなデパートが建っていました。そういう光景に衝撃を受けたり、日本語を話す老人が居られたり、そういう人に助けて頂いたという経験もあり、そこから台湾に興味を持ちました。

だからその時たとえばその友達が韓国に行くと言っていたら、多分僕はここにいないと思います。

では現在研究されていることの他に研究したいテーマはありますか

農業は研究テーマにしてみたいと思います。日本でも農業は色々言われているでしょう。だから本を買うようにして、読むようにしています。

あとは『平生釟三郎日記』の編集に携わるようになったことと、最近偶然なのでしょうが、移民関係の話を聞くことが多く、戦前の日本の移民等を調査してみたいです。平生さんはブラジル移民に尽力しましたが、植民地にも移民はたくさんいますし、東南アジアにも移民はたくさんいます。個人で行く人もあれば、企業の海外進出で移民になることもあり、国の政策で行く移民もいます。そういうことを体系的にみて戦前の移民はどうなっていたんだろうかということを研究したいと思います。

本当に研究のネタは尽きません。研究したいテーマが出来るかどうかは分からないけども。現代のことを研究している人はアンケート等で自分で資料を作れるでしょうが、歴史を研究しているとすでにある資料を使わないといけない、資料発掘をしないといけない、資料がなかったら出来ませんから。研究にならないから、そういう制約があり、やりたいことが出来るとは限りません。ただやりたい事はたくさんあります。

平井健介（ひらいけんすけ）
慶應義塾大学大学院
経済学研究科後期博士課程
経済史

学生時代の思い出はありますか

大学院生の頃は結構しっかりと研究していました。僕の通っていた大学院は結構上下関係が密だったこともあり、先輩と色々と話すことで勉強出来ました。一方、僕の指導教授は結構のんびり構えていて、自由にさせて頂ける人でした。先輩に厳しく指導して頂き、そういう人間関係が非常に大事だと知ったのが大学院生の生活でした。研究は一人でするものですが、一方でそういう人間関係を大切にしないとやはり研究はうまくいきません。こういうことに失敗している人は結構ドロップアウトしています。今でも非常によくさせて頂いて、よく勉強させて頂いています。

この大学がどうか分かりませんが、僕がいた大学には大学院生の研究するスペースがあり、普段はそこで過ごします。でも、夏休み等になって、自由に過ごす日があると、本当に誰とも喋らない時間が増えます。僕は昔たばこを吸っていたのですが、ある一週間にコンビニでたばこを買う時の店員とのやりとり以外に何も喋ってないということに気づき、結構愕然とした覚えがあります。

ちなみに僕は白髪がありますが、これは修

士論文を書いていて、その時に白髪になったのだろうと思います。しかも博士論文を書いたときに、その白髪が増えました。

それぐらいかな、僕が苦労していると思ったのは。楽しいことは、何か新しい事を発見した時です。それが楽しいと思えなかったら、この仕事をやろうと思いません。３０歳を過ぎるまで全然お金が入りませんから。

どのようなゼミを築かれ、どのような学生を募集したいですか

大学にはもちろん講義があって、知識を吸収することが一つですが、大学生になったら、自分で知識を発信して自分で新しいモノを考えないといけません。ただ教員の話を聞いているだけでは全然駄目で、皆と色々ディスカッションしながら新しいものを創っていくのがゼミであり、ゼミは学生主体でなければならないと思っています。だから、学生が何でもしてくれるゼミが一番良く、そういうゼミが出来ればいいと思っていますが、それは学生の意欲次第ですから、意欲のある学生を募集します。

僕はアジア経済史のゼミを開講しますが、歴史だけに捉われずに、現代アジアの政治、社会、さらには経済に興味を持っている人も募集したいと思っています。とにかく自分で問題意識や意欲を持っている学生、そういう学生がいると自然に良いゼミが築かれるのではないでしょうか。

教員主導ではありません。教員はほとんど話さず、例えば、九十分の間にトータルで教員が五分くらい話し、八十五分ゼミ生が話している。そういうゼミが本来のゼミだと思います。そういうゼミが出来ればいいと思います。

平井先生、ご協力
ありがとうございました。

甲南大学経済学会編集委員
発行日　2012/07/06
学会ニュース第１号
インタビュー日　2012/05/10